KULIC

8

1975・9

慶應義塾大学研究・教育情報センター

Keio University Libraries & Information Centers

KULIC 8

目　次

1……医学情報センター所長に就任して　嶋井和世
3……国宝“秋草文壺”の思い出　清水潤三
7……レオナルド・ダ・ヴィンチの地図　山岸　健

図書館サービスとシステム化
13……図書館とコンピュータ　細野公男
16……レファレンスサービスから情報サービスへ　東田全義
19……Deposit Library —共同書庫のアイデアー　加藤孝明

＝トピックス＝
23……図書館・情報学科に博士課程開設

＝ティールーム＝
6……文献収集によせて　中村治雄
12……語り合う人々　仙名　保

＝スタッフルーム＝
22……合同研究会　佐藤和貴
24……雑誌業務を担当して　井上加代子

＝資　料＝
25……Ⅰ．「三田学会雑誌」の刊行状況調査　安西郁夫
28……Ⅱ．年次統計要覧—昭和49年度—
32……編集後記

〈表紙〉孫福　弘　〈カット〉加藤孝明，高橋幸久ほか
〈写真〉関　洋

KULIC第8号＊1975年9月1日発行＊編集人 福留孝夫＊発行人 高鳥正夫
＊発行所　慶應義塾大学研究・教育情報センター本部事務室　〒108 東京都港区三田2—15—45＊電話（453）4511（内線 3027～8）＊印刷所　梅沢印刷＊

医学情報センター所長に就任して

医学情報センター所長
嶋　井　和　世
（医学部教授）

外山前所長の後任として，医学情報センター所長を引受けないかとの話しを受けた時，正直のところ，所長としての性格や，その責任の重さから考えても，分にあらずと感じました。以前，北里記念医学図書館の時代から図書委員を何期か経験していましたので，図書館の事情の概略は理解しているつもりでしたが，所長の職責となるとそんな生やさしいものではないことを感じないわけにはまいりません。

外山先生のお話しでは，所長はセンター運営上のあまり細かい問題にまで首を突込む必要はないが，要は，医学部との間の仲介役になって，医学情報センターの発展のために必要な事柄を，学部長や全情報センターの所長などと折衝してくれれば良いのだということでした。しかしながら，そう言われる内容を考えれば，ますますこれは大変な仕事だなと考えざるを得ませんが，永い間，図書委員や協議会委員の名を汚していた手前，引き受けざるを得まいと判断し，覚悟をいたした次第です。

さて，医学部の教育，研究体制の中で，現在，医学情報センターが果してゆかなければならない役割を考えてみると，私なりにもその運営の現状が決して良好なものではないということが分ります。

先ず図書購入の問題，これは塾全体としての財政と図書購入費との問題の中で検討していかなければならないことと思いますが，殆んど単行本の購入が中止され，新規に雑誌が増えることは皆無に等しいといった事態は，時々刻々，情報を提供してゆかねばならない情報センターとしては看過できない最大の問題点だと思います。数年前，医学情報センターが，相当数の継続雑誌の購入中止に踏みきらざるを得なかったという出来事は，医学部全体にとって尚記憶の新しいところです。医学部内では医学情報センター以外に資料を置いているところがないだけに，学内の利用者が医学情報センターの資料に対する依存度はかけ替えのないものであり，その度合は今後ますます高まるばかりです。最近の物価高は事態をますます悲観的にするばかりと思いますが，何らかの抜本的な対策が講ぜられない限り，医学情報センターの構成が段々小さくなっていくというような印象さえも受けかねません。

次に，医学情報センターは，医学部との密接な関係をより円滑にしなければならないことを感じます。多分に印象的かも知れませんが，北里記念医学図書館が医学情報センターになって以来，なにか医学部の動きと遊離した存在のように感じられます。事実，医学情報セタンーは医学部の附属ではなくなったということを往々にして耳にすることがありますが，名称こそ変わったにせよ，それはあくまでも組織上のことであって，医学情報センターは歴史的にも北里記念医学図書館の後身であり，その主たる利用者が医学部の教職員であることには変わりない筈です。このことについては，そういう印象を受ける原因がどこにあるのか今後勉強してみるつもりですが，医学部へのＰＲの徹底，協議会や図書委員会の意見の積極的な吸

いあげ，視聴覚資料の拡充など，問題解決の糸口になりそうな課題を検討したいと考えています。

医学情報センターで提供しているサービスについては，（財）国際医学情報センターとの関係もあって，一口には申せませんが，たとえ医学情報センター独自のサービスでなくても，その建物に行けば，さまざまな医学に関する情報サービスを受けることができるという点では，一般の大学医学図書館の果している機能に比べれば格段の開きがあることは医学部の方々にはご理解頂けると思います。（財）国際医学情報センターとの関係については，今後勉強せねばならない課題の一つですが，財団では前所長の外山先生と前副所長の津田先生が常任理事として活動されているので，医学情報センター運営責任者の先輩としてご意見をお伺いし，また両機関の関係等についても卒直に話合っていきたいと考えています。

冒頭，医学情報センターのことは大体理解しているつもりでいると述べましたが，現実に所長の立場として改めて，医学情報センターの現状や現場に接して考えてみますと，まだまだ理解不十分なことばかりだということを強く感じました。私の唯一のたのみは，医学情報センターが有能な職員を揃えていることと，他の支部センター所長の諸先生もそれぞれベテラン揃いと伺っていることであります。関係諸兄のご指導を賜わり，所長の第一歩から勉強して，その職を全うしたいと考えておりますので，よろしくお願いいたします。

（昭和50年6月25日）

＝〈本部事務室〉メモ＝

◇研究・教育情報センター協議会

昭和50年度第1回協議会は4月25日（金）図書館記念室にて開かれた。

①協議事項

医学情報センター所長の任期満了に伴う，新所長候補者の推せんの議がはかられた。その結果下記の通り決定された：

医学情報センター所長

医学部教授　嶋井和世君（新任）

昭和50年4月より2年間

②報告事項―年次（49年度）報告

「年次統計要覧」に基き本部事務室より，その概略が説明された後，各支部センターより主たる活動と業務の報告と説明がなされた。特に，各地区ともに書庫スペースの狭隘が強調された。

＝〈医学情報センター〉メモ＝

◇指定寄付金（図書購入費）

①医学部助教授・講師部会より金50万円也（50年1月）

②医学部第54回生より金30万円也（50年3月）

◇複写サービス（付属事業）の再開

これまで（財）国際医学情報センターに委託されていたが，学内利用者の文献複写に対しては当センターが直接サービスを提供することになった。第一年目の49年度の実績は，68,299件で枚数では536,456枚となっている。

国宝“秋草文壺”の思い出

清水潤三
（文学部教授）

このたび恒例の図書館（三田）における展覧会が開かれるに当って，* 主題を“考古名宝展”とすることがきまり，わたくしたちの考古学研究室が協力することになったが，その際義塾にある唯一の国宝である“秋草文壺”が中心となったことは当然の成行であろう。国宝指定を受けているため通常自由に展示することが困難なので，この機会はわれわれにとっても喜ばしいことであったけれども，会場が広いとはいえず，長文の解説を掲げることができなかったので，納得がいかず不満に思われた向きも少なくなかろうと思い，この紙上を借りて補足的な思い出を語ることにした。

むかしむかし，現在の工学部のある矢上台地の南々東に当って加瀬山という独立丘陵があった。日吉駅から2キロ弱のところで，当時は矢上台西麓の道をたどって行ったものであるが，戦中から戦後にかけて削平されてしまい，最近では広大な市街地となり，それを貫く坦々たるアスファルトの舗装道路を我物顔に走り廻るトラック群しか目に入らなくなったのは，まことに恐れ入るほかはない。なにしろ約2カ月に亘って毎日その丘に馳せのぼり，発掘作業に汗を流したところが空中に雲散霧消してしまっているという経験は何かしら恐怖の念さえ感ずるからである。この間，久方振りに訪れた登呂の遺跡でも同じ薄気味悪さを感じたのであったが……。

さて閑話は休題として，昭和12年の初夏当時，学部の2年生だったわたくしは三田史学会主催の加瀬山古墳発掘に参加し，ほぼ西北～東南に延びる丘陵上にあった“白山”と“第六天”の二つの古墳を発掘した。ほとんど3カ月に亘る調査も大きな成果を挙げて終り，地主をはじめ現地の協力者に感謝すると共に，何等かの新発見があった際の通報を依頼して帰った。それから5年の年月が流れ，卒業と共に普通部に3年奉職し，文学部助手に転じた昭和17年4月の終りになって，突然加瀬山の地主N氏から松本信広先生の許に連絡が入った。何か出たらしいからすぐ見てくるように，先生は新任のわたくしに実査を命ぜられた。

記録には4月29日とあるが，わたくしはひとり日吉の駅を降りて，往時を偲びながら小雨もよいの歩き馴れた小道を辿った。今度は何が出たのか，あの丘陵上にはもう古墳はないことが解っている，あの際1個発掘調査した“地下式土坑”なら可能性はあるがなどと空想は尽きなかった。先生の口ぶりでは土器のようでもあるが……。考古学に魅せられた者はこのような時がもっとも楽しいのだ。

N氏のお宅についてみると，どうも様子がおかしい。御無沙汰の挨拶もそこそこにN家の方々はわたくしを裏の竹藪へつれてゆく。雨がだんだん大粒になってきて，ほの暗い竹藪の中にころがっている壺は何かしら無気味である。起してみると内部は泥で一杯，点々と白く見えるのは紛れもない火葬骨だ。骨片が土にまみれてほの白く浮き出

* 日吉出土考古名宝展　6月4～6日　於 図書館記念室

しているのである。発掘をやっていれば貝塚の場合など，骨ばかりになった仏様が寝ていらっしゃるのは別に珍らしいことではない。すでに十分に経験ずみのはずなのに，この場合はどうも気味が悪かった。念のため外側の泥を洗い落しにかかったが，ジメジメした薄暗い竹藪の中の作業はあまり感心しなかった。まだ歴史時代の陶器には興味をもっていない若輩だったから尚更であったと云っておこう。

しかし，ようやくあらかた泥を落した壺を見なおしてみると，何だか別の気持に駈られてきたのもウソではなかった。飴色の釉，豊かに張った肩から胴への線，キツイ線を見せる口頸部，さらに次々に現れてきた蝶やトンボの図形，鋭い線で画かれたススキやカラスウリの箆描文様などなど。こんなものは見たことがないなァ。このような直観はすべて当っていたのだ。しかしこの時点では，決してその価値を正しく把握していたわけではなかったというのが正確であろう。だが考古学に携わる者の常識として出土地点を確認せねばならない。白山古墳の後円部はそのまま加瀬山の東南麓の斜面になっているが，その山裾の部分は新道のために削られ，赤土を露出していた。「ここです」と指示された場所には既に構築の跡はなかったが，多数の細長い川原石が散乱している。作業にあたった人びとの口々に語るところから，穴を掘り川原石を積んだ小さな石室があり，壺はその中に安置されていたことは間違いないと悟った。まさしく一種の墳墓に誤りないことが明白であったが，構造の詳細はすでに破壊が徹底的で窺う術もないことが解った。骨壺には皿などの蓋があるものだが，その有無も知り得なかったけれども，純朴な人びとの証言からすれば無かったと考えるよりほかはないと思われた。

わたくしの報告を聞かれた松本先生は直ちに壺を寄贈していただくように命ぜられた。数日後，河北展生氏とわたしは，今度は二人で加瀬山へと向った。内部のお骨は近くのお寺に納めて回向を頼み，リュックサックに入れた壺は，二人に代る代る背負われて三田の考古学研究室に到着したのである。

さて当時の考古学研究室には柴田常恵，大山柏の二人の講師がおられ，共に陶器について十分な鑑識眼を持っておられたが，お二人とも珍らしいものだと嘆声を漏らされ，或いはつまらぬものを大騒ぎして持ち帰ったものだと笑い者にされるかもしれぬと怖れていたわたくしは却て面目を施こしたのであった。上野の博物館から先輩の松下隆章氏も見え，保坂三郎氏も駈けつけられて，次第に此の壺の噂は学界に大きな波紋を呼ぶに至ったのである。こんな壺は見たことがないというのが全ての人たちの嘆声であり，わたくしの鼻は心の中で次第に高くなっていったわけである。しかし小人が妙な事を仕でかすとロクなことはないもので，7月に入るとわたくしに“赤紙”が来て，爾来4年間わたくしは大陸で輜重兵として苦闘しなければならなくなった。ようやく一人前の兵隊になった頃，徳県という町の兵舎に河北君の手紙が届き，薄暗い電燈の下で封を切ると，この壺には「秋草文壺」という名が与えられ，このたび国宝に指定されたと書いてある。赤紙を手にした瞬間よりも強烈な打撃にわたくしは驚き呆れ，思わず我を失った。そして望郷の念に駆られた。この複

雑極まりなき気持は今なお忘れんとして忘れ得ない。

終戦後一年ほど経て，わたくしは幸いにも無事に故国の土を踏み，東京に戻って秋草文壺に対面することができた。砲煙弾雨をくぐりなどというものではない軍隊生活ではあったが，アメーバ赤痢を克服して帰国できたのはこの秋草文壺の御加護かと真面目に考え出されることである。

戦後になって制度が改正され，新らたに新国宝の指定が制定された際にも，この壺は真先に指定を受けた。現在でも陶器で国宝指定を受けているものは10点に満たないという。そしてわたくしはその発見者としての栄誉と讃辞を受けることが屢々である。ただ直感はあったというものの，当初からその真価をどれほど認識していたかといえば，実ははなはだ頼りないものであったというほかはない。今日まで，いろいろこの壺の恩恵を受けることが多いけれども，また讃辞を聞くことも度々であるけれども，わたくしとしては運がよかったのだとしか云いようがないのを今となって恥ずかしく思うのみである。

なお，この秋草文壺は今日に至っても類品が見出されないという不思議な特徴をもっている。またその製作地についても当初から諸説があって確定されなかったが，最近その道の超エキスパートであられる沢田由治氏から，やはり常滑の製品と見てよいという研究成果を漏らしていただくことができた。また沢田氏によってこの壺が修験道関係の遺品と考えられるという新説を承わることができたので，ここに記して読者と共に歓びをわかちたいと念ずる次第である。

（昭和50年６月記）

＝〈三田情報センター〉メモ＝

◇展示会（昭和49年度）

①R・ムシル展（日本独文学会，Robert Musil Archiv 共催）　5月10～14日

②佐藤春夫詩碑除幕記念展　5月29～31日

③「演説の発達に関する史料」展ー三田演説会発会満百年記念（塾史資料室共催）6月5～7日

④眼で見る日本文学の流れ（国文研究室協力）　10月23～25日

⑤歴史人口学展（経済学部速水研究室協力）　11月13～15日

◇図書館蔵書の重要文化財指定（49年6月9日）

①「大かうさまくんきのうち」
②「後鳥羽院御抄並越部禅尼消息」
以上２点

◇三田文学ライブラリーへの寄託・寄付（49年7月）

①高浜虚子自筆の句稿ほか（寄託）
②高浜虚子所蔵の俳句関係図書約600冊（寄付）

文献収集によせて

中　村　治　雄

信濃町の医学部にある情報センターの評判は，他大学の医学部の人からは，非常によい。自分自身が，医学部に籍を置いていると，まさに"燈台もと暗し"の感があり，「古い雑誌」，「新しい単行本」の少ないことなどを，時に痛切に感じ，結果的には，予算の枠につきあたることで，諦めざる得ない破目に陥入ったりしている。

医学の勉強は，より現在の国際的な研究動向を知らねばならないことが多い。これは多かれ少なかれ，どの分野においてもそうであろうが，医学においては，特にその必要性が高いと考えている。

昭和41年に，アメリカでの留学を終えて，帰国して以来，この様な意味で，私は最も，情報センターにある *Current Contents*（以下ＣＣと略す）を利用させていただいている。恥を曝すことになるわけだが，私は，昭和39年にアメリカに留学する以前に，この週刊の小冊子の存在に気づかなかった。アメリカの研究室で，しかもそこは，ＣＣの発行地であるという奇縁もあって，きわめて能率よく利用させて貰う様になった。帰国してから，この小冊子を読む機会を，専ら，情報センターに頼っている。勿論，個人的に購読すべきなのかも知れないが，すっかり，情報センターの丸い印の押してあるものでないと，なじめなくなってしまった。

自分の研究にとって，最も必要な論文を，直接著者に請求しているが，この回収率が，またかなりよいことに驚いている。自分のメモによると，請求論文の数は，昭和42年から，昭和49年暮まで，年平均約650編であり，実際に自分の手元にもどってきているのは，510編平均である。つまり，約78％の回収率を示している。未回収のもの約1/2は，すでに文献が著者の所になくなったもので，その断り文を送ってきている。他の1/2は，全く梨のつぶてに属するものであるが，その数は比較的少ない。これらの文献は，自宅のキャビネットにファイルしているが，これをコピーで保管していたら，おそらく倍以上のスペースをとってしまうことは確実であり，論文を書くにしても，きわめて便利な思いをしている。

しかし，このＣＣへ収録されている論文タイトルはやや限られており，例えば，*Keio Journal of Medicine* や *Phillipine Heart Journal* など英文でもアメリカ以外のものが少ない。*Index Medicus*（以下ＩＭと略す）が出てくるまで待つわけにも行かず，出来るならば，より広い所から論文が掲載されることを望んでいるが……。それも実際には，色々の問題がある様で，なかなか思った通りにはいかないものである。最近この種の速報が日本語でも，まとめられてきている様であるが，私は，そのスピードとカバーしている分野がどの程度のものであるかよく解らない。しかし，いずれにせよ，私は，これらの医学の文献集が最新のレポートをのせるという他に，できれば，いくつかの分野に分類された上で，Chronological な Order でファイルされていると利用者としてはすこぶる便利であろうと常に感じている。

慶應義塾大学
昭和 50. 9. -1
医学情報センター

つまり，ＣＣやＩＭを内容別にバラバラにすることができ，しかも同一分類内で追加しながら，一つにまとまってファイルされるとよいと思う。その項目はＩＭのもので十分である。この様な希望は多少編集者になされるべきかも知れないが，この様な Sorting が情報センターでできないものかと思う次第である。

唯，一抹の不安は，苦労して文献を集めた時に，初めて，それを誇る喜びと，まとめる興奮を味わうものであって，情報センターがあまりにも，そのサービスに徹した時に，きわめて便利となることを感謝するであろうが論文を書く喜び，興奮が従来より減ってしまうのではないかということである。まさに人間は我儘なものである。

（医学部内科講師）

レオナルド・ダ・ヴィンチの地図

山岸　健
（文学部助教授）

"経験の弟子"レオナルドは，地図の制作者でもあった。普通，地図は，記号化された生活空間とみられるであろう。地図は，生活世界の情報を提供するメディアである。レオナルドの地図についても，このようなことがいえるが，彼の残した地図は，いずれも，一枚の絵としても眺められる。これらの地図を「モナ・リザ」などの絵画と比較すると，一見したところ，なんらの結びつきもないように思われるが，「モナ・リザ」の背景に描かれた山岳風景は，レオナルドの地図にみられる自然景観と決して無関係とはいえないのである。レオナルドの多数の素描を丹念に見てみよう。彼の絵画を理解するためには，こうした素描の世界を十分に知らねばならない。さまざまな主題を扱った素描の世界は，そのまま，レオナルドの日常生活の世界であった！自然を描いた素描を見ると，それらの作品と地図のつながりが指摘される。画家であったレオナルドは，彫刻の制作者であり，また，科学者，技師でもあった。それのみならず，この"経験の弟子"は，すぐれた哲学者，思想家であり，なおかつ，解剖を試みた人でもあった。有名な解剖図は，レオナルドの作業全体の本質をみごとに物語っているが，各種の地図も，それらの解剖図と同様に，レオナルドの制作過程や，彼の観察，思索，制作のスタイルを知るために貴重な資料とみられるであろう。レオナルドの地図は，生活世界を表現する一つの実験！　であったように思われる。

レオナルド・ダ・ヴィンチ（Leonardo da Vinci, 1452—1519）は，観察，実験，思索，制作を一体化させつつ，対象の根底，背後にあるものにも注目し，あらゆる対象を正確に，かつ，優美に描いた画家であった。画家レオナルドにとっては，徹底した観察こそ，制作を支えるものであり，彼は，飛ぶ鳥や舞い落ちる紙片を停止した状態で見ることができる眼をそなえていた。あらゆる対象は，彼にあっては，分解されもすれば，組み立てられもするのである。彼の観察眼，計測能力，すぐれた表現力は，卓越していたが，それのみならず，レオナルドには，豊かな想像力と感受性がみられた。最高度に発揮された理性と感性，それに眼，あるいは，頭脳と化した手があればこそ，唯一無比のレオナルドの世界が，かたちづくられたのである。こうした世界には，ルネサンスの精神と形象が，きわめて鮮明に認められる。われわれは，今日，彼の作品に接した場合，描かれたものの形態や色彩，構図などを，ただ見るだけで満足するわけにはゆかない。作品のうちにある思想の理解が要求されるのである。彼は，考えることを楽しむ人であった。残された彼の手記は，レオナルドの思想の奥行きが，並々ならぬものであることを示している。ヤスパースは，レオナルドを哲学者として位置づけた。

レオナルドの独創性，創造性，計画性，知的探究心は，まことに驚嘆に価する。こうした彼の精神，態度，行動の独自性は，その手記にみられる科学の諸領域にわたる考察，さまざまな分野に及ぶ作業などに明確に認められる。彼は，建築や都市計画，それに，軍事などの諸領域などについても，独自の見識を有しており，生活に根ざした知

識や技術の運用に注目していた。今日，ウィンザー城の王室図書館に所蔵されている十数点の地図は，多かれ少なかれ，実用的目的にそって作成されたものと考えられるのであり，具体的にいえば，土木・水利関係の諸事業，軍事的目的などのために利用されたのである。レオナルドの地図の多くは，いわば，地形図，集落分布図であるが，なかには，イーモラ，ミラーノ，フィレンツェなどの都市図もみられる。イーモラの都市図〔1〕は，均等に分割された幾何学的図型のなかに，イーモラの都市が実態に即して表現されたものであるが，フィレンツェ，ミラーノについての簡略な地図は，いわば，都市計画図，都市再開発図ともいえるような地図である。これらの都市図は，ストリート・パターンと河川を中心としたものであり，ミラーノの都市図は，運河計画に関連した作品とされている。イーモラの都市図は，家屋や施設の分布が克明に記載された緻密な作品であり，城壁に囲まれたこの都市の航空写真図ともいえる地図である。建築や都市計画から都市図への推移が，こうした地図には認められるようである。レオナルドは，点と線と面を考慮しつつ，生活空間を分析し，生活空間のデザインを試みたのである。その場合，人間本位の構想が重要視されたのであり，都市の生活環境の改善や，日常生活におけるプライバシーの確保などが考慮されていたことは，注目されよう。ミラーノの都市図〔2〕は，解剖図の裏面に描かれたものであり，この都市図の右下部分には，小さく，車輪のスケッチがみられる。形態上の類似性に注目したい。この車輪のスケッチにみられる幾何学的図型は，イーモラの都市図の枠組をなす円形の形態にもつながるものである。地図には，レオナルドの幾何学（あるいは，数学）の精神が認められる。それにもまして，彼の地図には，画家レオナルドの才能が，明瞭に浮び出ているように思われる。

レオナルドの地図は，一点を表現したような都市図（もちろん，ここにも，線と面はみられる），河川とそれに沿った集落を表現した線と点を示したような地図，広域に及ぶ地域図で，点，線，面を全体的に表現した地図などに分類される。イーモラの都市図のような克明な平面図もあれば，線描ともいえる略図もあるが，レオナルドの個性が明確にみられるのは，立体的な鳥瞰図であろう。彼の地図を見ると，この種の鳥瞰図が最も多い。線描に終始している作品もあるが，濃淡の彩色が施された作品は，航空写真図のような効果を示している。風景画から地図への移行を考えるならば，われわれは，一応，風景画（風景素描）→立体的な鳥瞰図→平面図→略式の線描図，という関係を考えてみることもできよう。ただし，この矢印は，逆方向へも向かうものと考えられる。実在する山々，平野，河川，集落は，さまざまな形式で記号化されたのである。レオナルドの地図は，生活世界の記号化の異なる段階を示している。彼は，自然の本体，実相を探究した。そうした自然の総体や，悠久なる自然の歴史を把握し，そのようなものを表現し得る方法があるとすれば，かような方法の結晶化したものこそ，レオナルドの地図にほかならない。彼は，その手記で，〈過去の時代と大地の状態を認識することは，人間精神の花であり実である〉と書いている。絵画の背景となるものも，地図では，主題となる。大地，水，光，大気といった自然的宇宙が，地図に凝縮されている。レオナルドは，地質，地形，古生物（化石），水，光などに関心を示しており，地殻の変動，水の運動などをはじめとして，諸事象の運動・変化に特に注目した。そのような彼にとっては，地図は自然的宇宙と人間的世界とを同時におさめ得る装置・構図であった。

レオナルドの地図の原点は，独特の鏡文学で，1473年8月5日……などの書きこみがみられる，初期の風景素描（フィレンツェ，ウフィツィ美術館，所蔵）の眺望画「アルノ風景」（ペンとインク使用）〔3〕に求められる。風景を鳥瞰する視点が，この作品にみられるが，後の素描「アルプス地方の嵐」（赤チョーク使用，1500年頃，ウィンザー城，王室図書館，所蔵）〔4〕にいたると，こうした鳥瞰の視点が，一層，明確なものとなる。われわれは，かような作品から，容易に彼の地図の世界へと飛翔し得る〔5〕〔6〕。レオナルドは，鳥となって地表を観察し，大地の動脈である河川

や，地表の舞台装置ともいえる大地の景観を描いた演出家であるが，アルプス地方を旅して山岳風景をスケッチしたこともある彼は，そうした山々を作品のなかでも描き，そのうえ，洞窟探検を試みたと思われるレオナルドは，二点の，「岩窟の聖母」などにおいて，洞窟を描いている。「最後の晩餐」の背景にみられる山野の風景は，彼の地図にも描かれるような景観と決して無縁ではない。レオナルドの場合，数々のスケッチが分析，統合され，組み合わされたうえで，地図の作成が試みられているように考えられる。解剖図などにもみられるような，対象を多角的にとらえる仕方，鳥や飛行装置の場合に認められる，対象を分解し，組み立てる方法，対象の場面，場面をつなげて，対象の本質を把握しようとするアプローチは，地図作成に際しても，見出される。レオナルドの地図は，風景である。

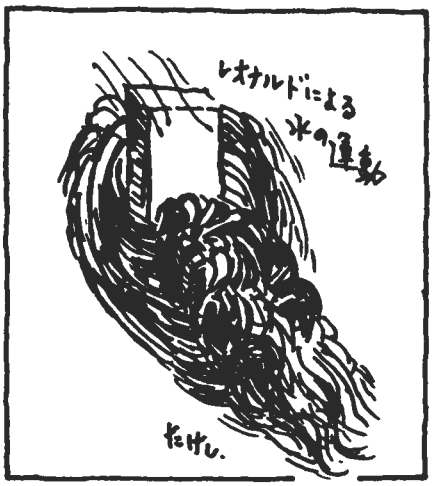
レオナルドは，小宇宙である人間の徹底的探究を試みたが（特に解剖図をみよ），それのみならず，大宇宙を一定の構図におさめた（地図をみよ）。彼の多方面にわたる思索，作業は，一連の解剖図と地図の間に位置づけられるように思われる。要するに，各種の解剖図と地図は，レオナルドの作業全体の構図の要と考えられる。彼の絵画には，地図がみられ，地図のうちには，絵画がみられる。しかも，そうした地図には，科学するレオナルドの精神が，うつし出されているのである。解剖図は，人体の地図であり，地図は，大地の解剖図にほかならない。レオナルドは，さまざまなサインやシンボルを用いて，日常の生活世界を表現した。世界を制作した彼は，卓越した情報処理者である。ヴィンチ村に生まれ，フィレンツェ，ミラーノなどの各地を点々と移動しつつ制作して，晩年にはアルプスを越えてフランスへ向かったレオナルドの旅の地図は，彼の生活世界を示している。マージナル・マンともいえるレオナルド・ダ・ヴィンチは，時間と空間を思いのままに処理し得た“経験の弟子”である。

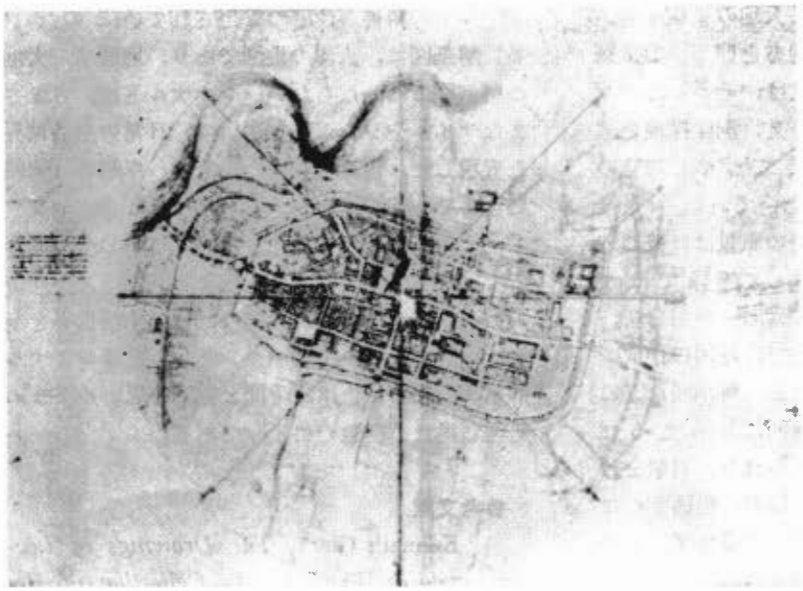
◇参考文献

① Kenneth Clark, *The Drawings of Leonardo da Vinci in the Collection of Her Majesty the Queen at Windsor Castle*, London, Phaidon Press, 1935, 1968～9, 3 vols.

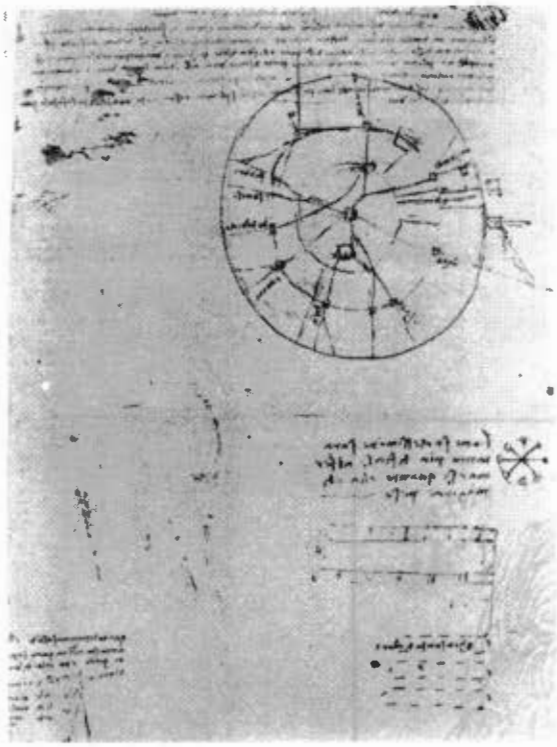
② 拙著，レオナルド・ダ・ヴィンチ考　その思想と行動，日本放送出版協会，昭和49年，（NHKブックス 207）

追記）慶應義塾の三田情報センター（図書館）には，レオナルドの『アトランティコ手稿』が収蔵されつつある。





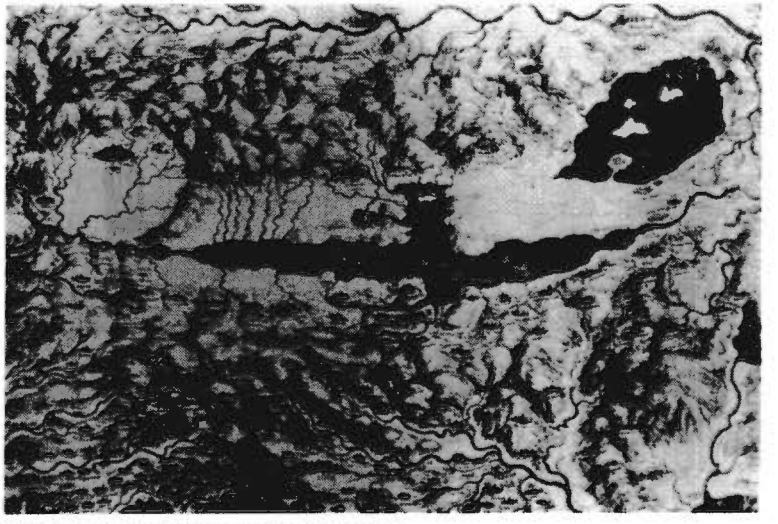
〔1〕
ウィンザー
12284
「イーモラの都市図」
1502年
チェーザレ・ボルジア
に従って従軍した際の
作品



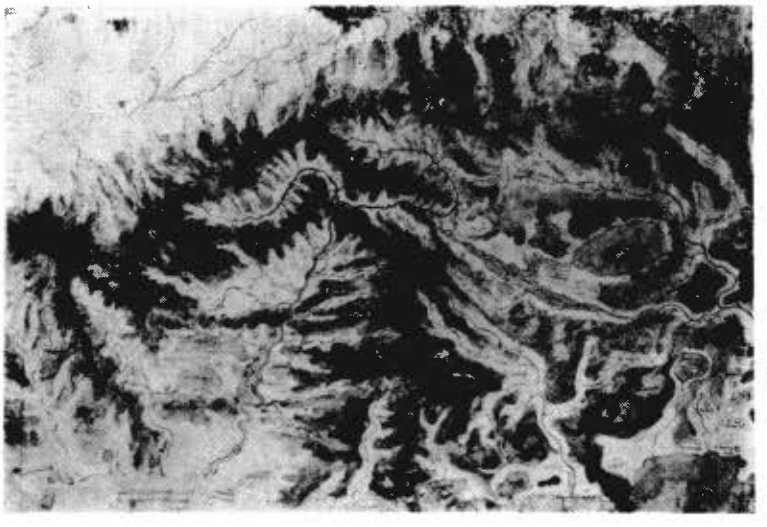
〔2〕 ウィンザー
19115 verso
「ミラーノの都市図」
右下は，重みをつけた車輪，
運動についてのノート，など

〔4〕 ウィンザー
12409
「アルプス地方の嵐」
1500年頃（年代については
諸説あり）

〔3〕
「アルノ風景」
1473年
フィレンツェ，ウフィツィ美術館



〔5〕
ウィンザー
12278
「アレッツォ，シエナなどを示す鳥瞰図」

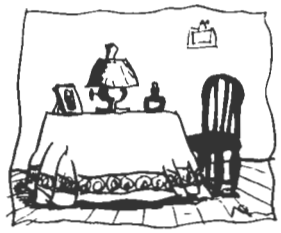


〔6〕
ウィンザー
12277
「北イタリアの地図」
1502-3年

語り合う人々

仙　名　　保

“語り合う人々”という名の付いた6人の群像――そのアブストラクトを囲んだ植込みのつき当たりのモダンな6階建ビルディングが，アーヘン工科大学図書館です。市の中心部にほど近く，工科大学の中心部と敷地を接しています。



市内に点々とする各研究所は大小さまざまの専門図書室をもっていますが，そこで用の済まないとき大学図書館を利用するわけです。実験台やトイレに掛けてある大学のマーク入りの手ふきを回収する車，切り落とした枝や，かき集めた落葉をのせた車とともに，各研究所で要請のあった書籍やコピーを配るための車も，沢山の研究所を縫うように走り回わっています。

必要な情報はこうして大学図書館から朝の牛乳のように毎日届けられていきますが，むろん，場合によっては大学図書館に直接足を向ける必要がでてきます。

1階の中央カウンターでカードに記入して本を待つ様子は日本の国会図書館と同じようで，かなりいらいらもさせられますが，新着雑誌のフロアは別になっていて開架式。呼び鈴を押してはじめてでてくる司書の人々はなかなかに親切で，コピーもその場でしてくれます。

1973年秋のある日，この新着雑誌のフロアである化学雑誌をめくっていると，“依頼機械検索の可能性と限界”という論文が目にとまりました*。著者はようやくドイツでも普及しつつある，コンピューターによる文献依頼検索に関して，否定的ではないものの，一種の警告を発していました。検索項目をしぼれば拾いそこねがふえ，それをおそれて項目を一般化すれば，ぼう大な数の文献がひっかかってしまって，これをふるい分けるのにまた多大の時間を要する――という，機械検索の持つ宿命的な矛盾から逃がれることはできず，結局，研究者が専門雑誌に直接目をとおすという，従来の“血の通った”検索法の良さは失なわれることがない，というのがその主旨。なぜなら，検索途上での思わぬ〈発見〉や，それによって生ずる〈わき道〉への踏み込みは，研究者本人にのみ可能だからです。

調べごとを沢山にかかえ，時間に追われながら，何となく，機械の力に頼れればなどと思わなくもない心境でとおり過ぎた“語り合う人々”に再び出逢ったときには，各駅停車で書きとめた文献のメモと数枚のコピーとを手にしていました。

---

* Fugmann, R & Ploß, G; *Argew. Chem.* 85 (22): 978-81, 1973.

（工学部専任講師）

図書館とコンピュータ

——利用者の情報探索行動の本質は変らない——

細野公男
（文学部助教授）

図書館活動にコンピュータが導入されて以来かなりの年月が経過し，わが国でもその導入が部分的には定着しつつある。

コンピュータ導入の理由にはいろいろあるが，その中で人件費高騰に伴なうコストの上昇を押えるといった理由は，現在のコンピュータが高価であることを考えればあまり説得力がなく，むしろ情報量の増大，情報サービスの多様化および質の向上を求める利用者の要求に対処することにその理由を求めるべきである。従ってコンピュータ導入による図書館活動の変化は，主に情報サービスの側面から考慮することが重要となる。

ところでコンピュータの導入は，図書館の仕事のみならず利用者の情報探索行動にも大きな影響を与えた。そこでコンピュータの導入が，その使用に適するように利用者の探索行動を本質的に変えるものであったかどうかを考えてみたい。

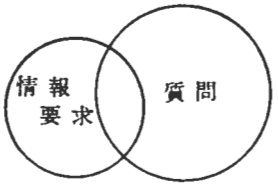
我々は抽象的あるいは具体的な情報要求に基づいて，目録カード，索引誌，抄録誌等を調べたり，図書館員にたずねたり，実際に書庫に入り資料を調べたりして必要な情報を獲得するが，その際の情報要求の形式として，

① もやもやしたもの
② 一応情報要求の輪郭がはっきりしているもの
③ 質問として述べたり書き表わせるもの

の三つが考えられる。ここで質問は情報要求の具体化されたものであるが，この段階でさえも利用者が自分の情報要求を完全に表わしうるわけではなく，情報要求と質問との間にはズレがあることが多い。たとえば考えられるズレとして次のものがある：

第1図

第2図



第3図

第1図は質問が情報要求の一部のみしか表わしていないことを示しており，第2図は質問範囲が情報要求よりも広すぎることを示している。また第3図は要求が充分質問に具体化されない一方不必要な事項が質問に含まれることを示している。このようなズレがある場合には，利用者が満足する結果を得ることは期待できない。

利用者がいろいろ資料にあたり吟味し，それに基づいて情報要求を次第に明確化，具体化していく行動はブラウジング（browsing）と呼ばれる。これは漫然と書店に入り，店内をぶらつきながらいろいろ本を手にとり比較し，読みたい本を決定する行動と類似のものである。このブラウジングと呼ばれる行動は，情報要求が明確あるいは具体的でない場合において非常に重要であるが，情報

要求が具体的であってもその重要性は損なわれるものではない。それに要求が質問の形に書き表わされたとしても，要求を完全に表現しうるわけではないからである。したがって情報を探索する過程で得られた経験を探索行動にフィード・バックできるブラウンジングは，人間の情報探索行動を考える際に欠くべからざるものである。情報量の増大および雑誌論文の利用の増大はコンピュータの導入と相まってこの行動様式に大きな変更を余儀なくさせた。種々な機関における文献情報検索システムの開発がその顕著な例である。

文献情報検索システムとは，あらかじめ文献情報とそれを捜し出すための手がかりを蓄積しておき，この手がりを基にして蓄積された情報の中から情報要求に合致した適切な情報を探索するものである。手がかりとしては情報の主題を表わす登録されたことば(索引語と呼ばれる)が主に使用されている。したがって図書館も一種の文献情報検索システムであるが，コンピュータを使用した上記機能を持つシステムを指すのが一般的である。

近年までこのような情報検索システムでは，情報の探索は次のようなステップで行なわれた：

1. 利用者が情報要求を検索質問の形に具体化し，システムに提出する。
2. それをシステムに精通したスタッフが検索式と呼ばれる，コンピュータが処理できる形のものに変換する。
3. 検索式に合致する情報が探索され，利用者に提供される。

したがって，利用者はブラウジングはおろか個人個人が持つユニークな探索行動を生かすすべもなく，システムで指定された様式で作成された検索質問をシステムに提出し，探索結果を待つだけであった。また利用者とシステムとの間にスタッフが介在するため，利用者が情報要求を的確に検索質問に変換できなかったり，スタッフが利用者の情報要求を正しく把握しそれを適切に検索式に変換できなかった場合には，利用者は望ましい結果を得ることは期待できない。本来，情報要求は完全に表現しうるわけではないため部分的な探索結果を求め，それをもとに検索式を修正する発見的（heurustic）な作業が必要である。人間が行なう探索行動では，ブラウジングがこの機能を果していたのであるが，単純なコンピュータ・システムにその機能を持たせることはむずかしいためこの作業には大きな制約がある。情報検索システムにおける検索式の修正は，利用者とスタッフとの間の円滑なコミュニケーションによってのみ可能となるが，このコミュニケーションは常に頻繁に行なわれるとは限らず，検索質問の提出時だけ行なわれる場合が多く，発見的な探索行動がとられることは少ない。

またコンピュータ利用の効率を高めるため，システムに提出された検索質問は，一定期間毎あるいは質問が一定件数に達した際にまとめて処理されるのが通例であるため，探索結果が直ちに得られることはなく，質問を提出してから結果を得るまでにはかなりの時間的ズレが生じる。これは緊急に情報を求める利用者にとっては，非常に重大な欠点である。

情報検索システムの開発により，多量の文献情報の中から利用者にとって望ましい情報を多面的に取り出すことが可能となり，情報の探索行動に大きな貢献をした。しかし一方コンピュータ中心的な機能は，人間個有の探索行動とは両立し難く，結果的にはシステムの効果を低下させる一要因となった。

このような欠点に対処するものとして，スタッフの助けなしに利用者が直接システムと接触し，システムとの対話を通じて情報を探索するシステムが開発されている。この種のシステムでは，利用者はシステムおよび情報の探索方法について，最小限の基本的な知識しか必要とせず，システムからの指示にしたがって順次質問を出すことによって情報の検索が可能となる。これは Computer Aided Instruction と呼ばれる，機械を使用した

反復的な教育方法と類似したものである。

このシステムでは，利用者は電動タイプライタあるいは情報装示装置を使用して，システムとの対話を行なう。利用者がシステムを呼びだすと，システムから利用者の名前，利用者番号などをキーボードからタイプ・インするように指示される。利用者の身分が確かめられると，次に利用者はコンピュータが処理できる形の検索質問（検索式）をタイプ・インする。利用者がそのような検索式の作成方法について疑問点がある場合，あるいはそのシステムの利用について不明な点がある場合には，随時システムにその説明を求めることができる。つまりシステム利用に関する詳細な手引きが，求めに応じて様々な形で利用者に示される。利用者が検索質問に使用したことばがそのシステムでは使用されていない場合には，システムはそれを指摘し，そのことばと関連し且つシステムで使用されている索引語のいくつかを表示する。また索引語のリストの表示を求めることも可能である。したがって利用者は，そのシステムの索引語に対して何んらの予備知識がない場合でも，対話を通じて情報要求に合致する適切な索引語を選択することができる。探索の結果，検索式を満足する文献の数，その文献の一部あるいは全体などが表示されるので，それをチェックして検索式を修正し，より適合した文献を得ることも可能である。このようなフィード・バック機能は，探索作業の実行中においても保障されている。

この種のシステムでは利用者とシステムとが常時結びついており，即時に情報が探索できるため，オンライン・リアルタイムの情報検索システムと呼ばれる。利用の側面からみたこのシステムには次の4つの特徴がある：

1. 望む時直ちに情報の探索ができるので，緊急な情報要求に対処できる。
2. 専門的な探索方法を知らなくても，システムの指示に順次したがえば，探索を行なうことができる。
3. ブラウジングが可能である。
4. 利用者がそれぞれ個有の方法で検索式の作成および修正を行ない，情報を探索することができる。つまりシステム利用に関して必要な最小限の制約を除けば，最終的に得られる探索結果は利用者の一般的な探索技術の能力に依存する。

オンライン・システムを使用した情報の探索は，上記の特徴から明らかなように，コンピュータを使用しない一般的な探索行動を踏襲するものといえる。両者間の顕著な違いは，オンライン・システムの使用が多量の情報処理が可能な点にある。我々の書庫を歩きまわり，また目録カード，索引誌，抄録誌を駆使して処理できる情報量は微々たるものであるが，オンライン・システムの利用はほとんど同様のアプローチではるかに多量の情報が処理できるのである。

コンピュータの導入は，伝統的な図書館活動に根本的な変革を持たらす可能性と，スタッフの使事が奪われるとする恐れから大きな反発をうけた。しかし情報検索システムにおける上記に示された変化は，コンピュータ導入によっても長い年月をかけて確立された人間の情報探索行動の様式を根本的に変えることはできないことを示している。オンライン・システムには利用者から出されるいろいろな要求および利用者のユニークな探索行動を想定して，それに対処できるような機能が組み込まれているため，システムの構造や制御が複雑であり，一般にシステムの開発および利用には多額の費用を要する。それにもかかわらずこのようなシステムが開発され定着しつつあるのは，人間の情報探索行動との共通点が多いからであろう。

現在，社会のいろいろな分野で今まで宣伝されてきた考え方がその威力を失ない，代りに見捨てられていた考え方が新たな脚光を浴びることがよくあるが，オンライン・システムの出現は同じように考えることができる。つまり情報の探索におけるコンピュータ万能から人間中心への方向転換を示すものである。

レファレンス・サービスから情報サービスへ

東田全義

三田情報センターにおける情報サービス担当の業務は，現在何を旨とし，何をめざしているかについてその概要を記してみたい。普通，図書館員の講習会はもちろん，図書館学の授業にしても，レファレンス・サービスについては，これまでに知られている技術を羅列的に教えこまれるか，レファレンス・ツールの主要なものについて解説されるのが実情といえよう。理論的な面があるとすれば，せいぜい定義の歴史を扱う場面ぐらいである。

日本におけるレファレンス・サービスは，まだ発展途上の段階であるだけに，習った側の人達は，各自の置かれる条件によってさまざまの受け止め方をしている。“参考図書を紹介すること”，“書誌を作ること”，あるいは一般的に“質問に応えること”等々である。いずれも全くの間違いではないとしても，部分的か一面的であって，その全体像は十分につかめていない。しかし，定義の歴史も含めて，それらの断片を貫いている本質は，“来館者への直接的な人的援助”といえる。

このことにしても，いざ図書館の現場に立ってみると，それほど単純なものではなく，担当者個人，担当部署固有の作業としてあるのではなくて，図書館内の他の部署，つまり他の機能と密接な関連をもった極めて流動的な機能であることがわかる。極端な言い方をすれば，そのような担当者や部署がなくても事がすんでしまう一面があるかと思うと，一方においては無限の課題を担っている一面がある。

近代図書館理念は，その無限の課題の方向に図書館員を駆り立てているのである。したがってここでは，そうした図書館員の努力の過程にあるものとして，レファレンス・サービスの現状と，情報サービスの展望を述べることにする。

1. 人的援助の基本部分

レファレンス・サービスとは，資料とその利用者とを結びつける仕事だという表現もある。三田情報センターの資料とは，図書館と研究室の資料を合わせたものであり，利用者とは，学生，教職員，そして一般社会人も一応含めているのである。そうした利用者が，知識の習得，新しい知識の生産，文化の享受という行動に携わる時，既存の知識なり文化遺産は情報として伝達されなければならない。しかし，情報の伝達には，一般に時間的空間的制約があり，それを克服する手段として文字とか映像があり，また図書，図書館，図書館技術があるといえる。

われわれは，図書館および図書館技術に関わっている。図書館は，遠い過去の時代の図書も，遠い国の図書も同時に収蔵するものであり，その中の図書館技術は，利用に際してそうした時間的空間的制約の克服を一層促進するためのものである。そういった面で図書館蔵書は個人蔵書よりも有利な点をもっているが，一方では人類の共有物という制約もある。また，図書館技術は情報利用の時間的空間的制約の一層の克服をめざすといいながらも，常に相対的なものであり，技術には必ず限界がある。

したがって，図書館内の物的諸装置にしろ，間

接的な人的機能にしても限界があるのであって，その限界の克服としての直接的な人的援助という技術が考えられたのであるが，それさえも，その図書館の絶対蔵書量なり，担当者個人の力量に限界がある。一方，利用者側にも限界がある。それは，自動車という利器があっても運転法を知らなければ役に立たないのと同じことである。図書館内の諸装置は，図書館技術として，一応多様な要求に応えられるようにと工夫されてはいるが，それだけにそのメカニズムを知っていなければ使いこなせないことは，機械類一般の使用の際と同様である。その上に，特定図書館の固有の特性は，機械類の場合の“当り外れ”よりも一層変化に富むものである。利用者側にしても，何をどのような形で求めているのか，そのための事前情報をどの程度にもっているかによって極めて多様である。

この双方の限界のギャップは，利用者が図書館員に尋ねるという行為で埋められようとする。それに応えるのが人的援助の基本部分という機能である。これは，三田情報センターでいえば，パブリック・サービス部全体において自然発生するものであり，簡単な図書館案内的なものは，部全体において責任をもたなければならない。しかし，そうした質問が量的に増え，あるいは質的に簡単に応えられない時（閲覧・貸出といった本来の業務を侵すような時）に，情報サービス担当の使命がある。もちろん人的援助の基本部分も情報サービス担当の本来の業務である。

2. 相互利用

相互協力というのは，図書館全体の他館との関係でいう総称とすれば，相互利用は，レファレンス・サービスが主として関わる，その部分的機能である。一つの図書館がすべての文献を収蔵することが不可能であることは言うまでもない。当然，求めるものがその図書館にないという事態が起る。最近のように図書館財政が苦しくなると一層その傾向が強まる。求める図書がその図書館にない場合には，本来ならその図書館で収書すべきものである。しかし，財政的な問題以外に，その図書館にとって，収書方針からみて余りにも特殊なものであったり，その時点で既に収書が不可能であったり，収書が可能だとしても利用の緊急性に応じられない場合に，相互利用の機能が必要となる。これは蔵書の限界を補う間接蔵書といえる。

現在採られている相互利用機能は，所蔵館へ紹介状を書くことと，複写で取り寄せることである。この場合，求めるものが自館にないことの確認と，所蔵館を確認することの作業がある。それには，総合目録，電話，郵便等による探索がなされるが，目録規則とか他館の特殊事情といった図書館的ルールを踏まえたコミュニケーションによらないと，間違いが起り，むだな時間を費やすことになる。やはり，図書館員が介入しなければならない点である。このことは，他館から依頼を受ける場合も同じ事情にある。現在，情報サービス担当の作業のかなりの部分が，相互利用関係に当てられている。

3. 情報検索

人的援助の基本部分は閲覧機能の限界を，相互利用は収書機能の限界を，利用者の限界との対応において補っているものとすれば，情報検索は，図書整理機能の限界を利用者の限界との対応において補うものといえる。図書館の分類体系は，図書館独自とも言えるものであって，現実の事象の体系なり，学問の体系とは同じではない。特に最近のように学問が多様な展開を見せている状況では，一層分類体系を無力化しつつある。しかも，整理作業は図書のタイトルを単位としてなされているのに対して，情報は一冊の図書の中から抽き出される。つまり本文（text）を読むことから情報を獲得するのである。

レファレンス・ツールと言われる文献目録類は，そうしたタイトル単位の本文群への経路の道標とすれば，事（辞）典類は，本文を読む時の補

助的ツールといえる。したがって，情報検索はレファレンス・サービスを超えた情報サービス本来の領域なのかも知れない。研究過程における読書行為がすなわち情報検索だとすれば，図書館員の領域ではないという意見もある。しかし，ある特定の情報を求めて読書したとしても，選んだタイトルのものからはそれが得られない場合もあり，本来の研究は集めた情報をもとにして，そこから始まるものであるから，ランガナータンの第四法則を待つまでもなく，研究者の時間の節約と考えるならば，近代図書館理念としても，情報検索の代行サービスは志向されなければならないであろう。また，道標（二次資料）の不完性の程度によって，必然的にサービスが情報検索に結びつかなければならないことも起りうる。

紙面の都合で，情報検索としての読書の構造，二次資料の不完全性と情報検索との関連についてはここでは述べない。現実の政策面から見るならば，情報検索サービスを可能ならしめるためには，主題知識なり外国語の知識が担当者に必要となり，それを複数の担当者で分担するよう組織しなければならない。一方，人的援助の基本部分なり，相互利用の機能は不断に維持されなければならないのである。情報検索は本文群との関係でなされるのであるから，蔵書の本体の充実はいうまでもなく，サービスとして行う担当者の力量の充実といったものが，利用者の信頼感を生み，そこに始めて本格的な情報検索サービスが成立すると考えられる。

（三田情セ　情報サービス担当課長代理）

＝〈理工学情報センター〉メモ

◇日本科学技術情報センター（ＪＩＣＳＴ）よりの寄託資料

毎年継続的に寄託をうけている理工学関係雑誌のバックナンバーの引取りとその整理を，49年度は7月15日～9月18日にかけて完了した：

外国雑誌	1,538種	2,653冊	計 5,022冊
国内雑誌	1,379〃	1,869〃	
外国特許明細書	3〃	500〃	

◇数理工学科関係図書の収集（49年度）

前年度に引続き同学科関係の図書資料は下記の通り補充された：

外国雑誌（カレント）	80種
国内雑誌（　〃　）	12〃
外国雑誌（バックナンバー）	25〃
単行書（洋）	298冊
単行書（和）	38〃

◇主な寄贈図書（49年度）

①東京計器総合研究所よりバックナンバー　60種　294冊　（6月11日）

②味の素中央研究所より昨年に引続きバックナンバー　10種　107冊　（7月19日）

③東洋製缶総合研究所よりバックナンバー　52種　235冊　（10月29日）

④千代田化工建設よりバックナンバー　218種　2,300冊　（11月18日）

Deposit Library ——共同保存書庫のアイデア——

加藤孝明

I．その由来

Deposit Library は，訳せば，「保存図書館」という風になるが，てっとり早くいえば，本の共同利用倉庫である。これは，もともと，あの，がむしゃらの癖に愚直な，なんでもやってみよう式のフロンティア・スピリット横溢するアメリカ合衆国の図書館界で発明され，実験されて，定着した数あるシステムのうちのひとつなのである。

図書館システムの合理化には，コンピューターの導入による事務能率の増進という花々しい一面があるが，他の一面として，図書館のネットワーク化という地味で基礎的な領域がある。同地域の，あるいは，全国の専門を同じくする図書館が協同して，総合目録を作製し，相互貸借を行い，特定の主題に関する文献情報を交換し，施設，装置を共同利用する，というのである。Deposit Library（共同保存書庫）は，そうした図書館の相互協力体制のひとつの要素として，目立たないが，重要な位置を占めている，

ところが，これはアメリカ合衆国の話であって，本邦においては，まだそうした完全なシステムというものは存在しない。環境も制度も人間の考え方も違う日本に，いくら洋式を導入しようとしても，その必要性に迫られてするのでない限り，なかなか定着するものではない。しかし，それが，どういう必然性に基いて，どういう考え方によって，どういう方法を以って運用されるのか，ということぐらい，少しばかり突っいてみるのも損にはならないと思う。

II．その思想

ものごとは，なんでも考え方ひとつで，すっかり違ったものになってしまう。

Deposit Library は，もとはといえば，パンク寸前の書庫から図書館を救うてだてはないものか，という切羽詰ったところから出てきた窮余の一策である。ただでも狭いところへ，旧くからある本がぎっしり詰っていて，そこへ新しく受け入れた本が，どしどし入ってくる。書架をいくら増設しても，まるで賽の河原の石積み。壁という壁を書架で埋め，あらゆる空間を書架のジャングルで潰していっても，本の増えるのが止まるわけもない。それでは，しようがないから，あんまり利用されない，汚い古い本なんぞは，どんどん捨ててしまへ，そうすれば，ずいぶんすっきりする，と人々は考える。これぐらいあっさりしていて，常識的で，最上の，しかも手のかからない解決方法は世の中のどこを探してもない。ところが，そううまくいかないのが図書館屋の世界なのである。

そこへいけば，自分の欲しい読みたい本がいつも保存されていて，正当な権利に基いて閲覧を要求しさえすれば，ちゃんと現物を手にすることができるというのが，大昔から今まで変ることのない図書館の役割りなのである。どんな妙な古臭い本でも，世界中で何人かは，そこに載っている情報を欲する人間がいるものだ，ということを常々念頭において，図書館員は仕事のプランを練る。どんな文献にも，最低限度の文化的価値は残るのである。例えば，終戦直後のカストリ雑誌にさえ，史料としての価値が与えられているほどだ。

本を保存するという仕事の意味は，大袈裟に聞こえるが，まさに，人類が文献という形でなしたいっさいの記録の蓄積を分担保存して，ひとつの文化遺産を守り，これを公開して，未来の人類へ伝えていくことに他ならない。図書館の仕事の基本は，金儲けでもなければ，教育啓蒙でもない。文化の遺産を保守することこそその基本である。そして，いつなんどきでも，この文化遺産の集積は利用され得るようになっていなければならない。誰かが必ず，なにかの記録を見ることを欲しているはずである。だから，めったやたらに本はすてられないのである。よみすてた雑誌を屑屋に売り，不用の図書を古本屋にひきとらせるというわけにはいかないのが，つらいところである。もしかしたら，今すてた本が，発行部数何万部のうちの，この世に残された最後の一部かもしれない。

そんなにいうなら，いっそのこと，十年に一度くらいしか利用されることのない文献は，まとめてどこかの倉庫に押しこんで，ぎっしりと積みあげておけばよい。という声があがるのは当然のなりゆきである。ただでさえ，満杯の書庫をかかえているところへ，図書館の文化的使命なんぞ押し出されると，もう，ぐうのねも出ない。そんな高邁な理念をいいだすまでもなく，どこの大学でも，研究所でもむやみにすてられると大変研究に支障を来すが，そうしょっちゅ使用するわけでもないという，図書，雑誌，統計，史料がわんさと附属図書館を占拠しているのである。

いくつかの図書館が協同して，ひとつの大倉庫を借りるなり，建てるなりして，めったに使わない資料はまとめてそこへ寄託してしまうと，各館，大いに助かることとなる。第一に，高価なスペースの使用が大いに効率的となる。稀にしか使用されない文献が夾雑物の如く書庫に混入していたのを取り除くので，しょっちゅ使用される文献だけが書庫を埋めることになる。そこで，利用する方も，利用者の読みちらしたあとを片付ける方も，たいへん楽で能率があがることとなる。つまり，利用度の高いものは，より accesible な状態に保たれる。書庫の狭猛からくるところの頻繁な書庫移動（これが案外の重労働である）の必要もなくなる。こんなに助かることはない。ここまで考えてくると，もうこれはどうしても，実行した方が，なにかとよさそうな気が，にわかに湧きあがってくるのは人情というものだ。

事実，東京大学では，安田講堂の中に倉庫を設けて，各学部図書館，各研究所から寄託された古本をぎっしり積み込んであるし，現に九州大学では，閲覧席，番人付のモデル・ライブラリをつくって運用しているほどだ。各地の国立大学の附属図書館は，ブロック毎に協同して，Deposit Library を設置しようと文部省にはたらきかけている。そのうち，我が慶應義塾においても，計画が練られる日が必ずやってくるにちがいない。どこかのキャンパスに慶應義塾 Deposit Library が実現した時には，各情報センターのセンターもより幅のあるものとなるだろう。

Ⅲ．その運用方法

夢のようなことをいっていても限りがない。Deposit Library は具体的には，どのように運用されるのか，大ざっぱなところを考えてみた。

1） 文科系と理科系の相違

文献の利用の仕方が，この二つの科学では，各々大いに違うところを先ず頭に入れておかなければならない。

理科系では，文献の利用価値は大体５年ぐらいで減少してしまう（まったくゼロになるということはない）。なにしろ日進月歩の世界である。昨日の新説は，もはや今日の旧説である。新説が新説を駆逐する。そこでどしどし倉庫入りの文献が出てくる。

ところが，文科系にくると，まったくその考えは通用しなくなる。文献に記録された思想なりデータなりが研究の手段となり，時には対象そのものとなる。資料はいつまでも手の届くところに置いておきたい。たとえ，めったに参照することがなくとも，遠いところにある倉庫に放りこんでお

くのは賛成しない。

Deposit Library の運用は，ここの違をよく見分けて，文科系，理科系，両様のプランをたてなければならない。当然，収容すべき資料の種類，形態，取扱い方も違ってくる。

2） 寄託基準と寄託審査機関

具体的にどういう資料が，どういう基準で寄託されるのかは，Deposit Library システムに参加した各図書館が協議して決定しなければならない。古くてあまり利用されなくなったから，なんでもかんでも引きとってくれというのでは，せっかくの Deposit Library も屑屋の倉庫同然となってしまう。

Deposit Library の運用責任者には，この基津に拠って，事前に寄託資料の審査をし，受け入れるか否かを決定する権限を与えておくべきだろう。更に，決定に迷いが生じた場合の安全装置として，上級の審査委員会を置いておく必要もある。

3） 寄託時の配慮

非常に技術的なことであるが，寄託する資料は，やはり寄託する側で，事前に協定された資料区分に従って，これをきちんと仕分けし，書誌データを完全に記入した目録カードを附し，順序よく荷造りして，倉庫に送りつけるといった配慮をすべきだろう。

4） 重複本の除去

全く同じ重複した資料を倉庫に並べておくのは無駄であるから，集った資料の重複調査をして，だぶりを省く必要がある。ただし，それには相当の書誌学的厳密さが要求される。同じ資料でも，版次の違うものは，だぶりと見なさない程度の慎重さが欲しい。

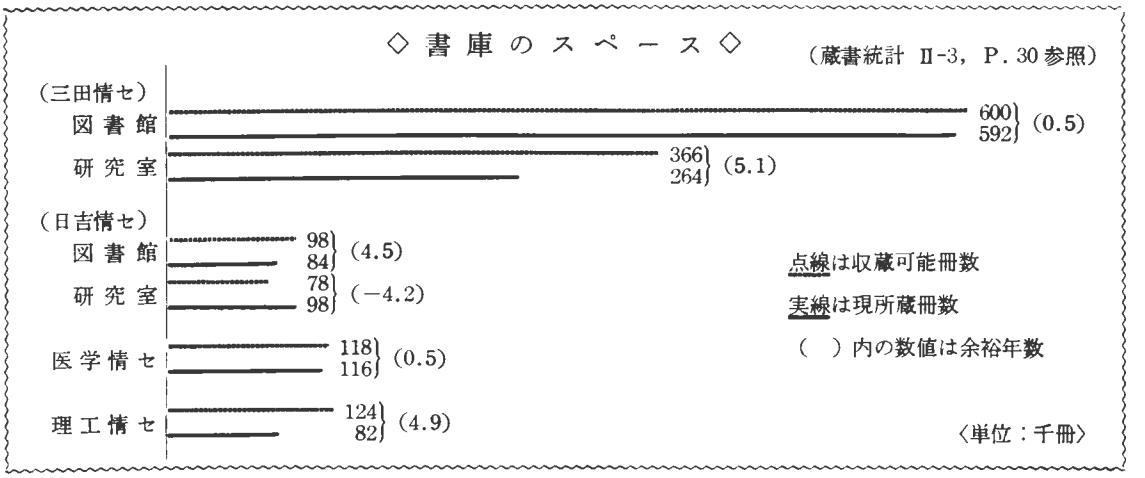
5） 利用者サービス

寄託された文献は，倉庫の中の書架に効率よく詰めこまれるが，やはり，それらは各図書館の書庫の延長なのだから，なにがどこに入っているかが，すぐわかるような所蔵目録をつくり，それを各図書館に配布しておき，要求があれば，すぐとりだせるようにしておかなければならない。遠隔地からの要求には，必要箇所の複写や，現物を郵送するというシステムもぜひ必要である。

6） サービス従事者

こうやってみると，Deposit Library の仕事は，ただの本の番人では，なかなかつとまらない。しっかりした専門家がこれを管理運用しなければ，ものがものだけに，とんでもない物置小屋ができあがるかもしれない。

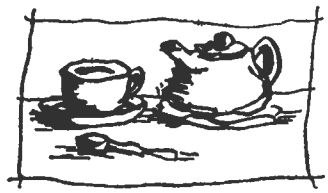
Directorship がしっかりしていても，本の倉庫の中で実際に働く連中がいいかげんでは，もともこもない。きちんとした教育訓練計画が必要とされるだろう。　（日吉情セ　P．S．課）



合同研究会

佐　藤　和　貴

医学情報センターでは今年1月から，毎週1回火曜日の午後4時から5時迄の1時間を使って輪読会を始めています。テキストに使われているアメリカ医学図書館協会から1970年に出版された「医学図書館実務ハンドブック」は医学図書館員の座右の書といわれているものです。この本の利用者サービスの章を職員が交代で調べてきては発表するわけです。世話人がいますから，世話人が解説を加えたり，実際に仕事を担当している職員が文中で述べられている資料を閲覧室から運んできたり，あるいは慶應での事例を話してみたりして，ただ読んで翻訳するだけに終らないようにしています。4月に新入職員をむかえましたが，彼女達にも職場になれた5月から，この輪読会に参加してもらっています。



職場が同じでも，なかなか一堂に会する機会がないわけですが，この輪読会の時間にはカウンター当番の人などごくわずかの人を除いてスタッフ・ルームに集合します。そして，共通の勉強時間を持つわけです。

この輪読会は医学情報センターの職員だけで行なわれているものですが，他に昨年から，東京都内の四つの医科大学で合同研究会という会合を持つようになりました。東京医大，東京女子医大，慈恵医大そして慶應の四大学では館内研修をより充実させるために合同で研究会を企画・運営することにしたわけです。会場は持ち廻りで，医学図書館界の最近の話題や職員の研究の成果を発表しています。

昨年4月に慈恵医大で開かれた第1回の研究会では図書館短期大学松村多美子助教授から“英国の図書館事情”についての話を伺いました。松村さんはかつて当医学情報センターでメドラースの仕事をしていた我々の先輩です。第2回は東京医大で6月に行なわれ，文学部図書館・情報学科津田良成教授の“メドラースと最近の医学図書館事情”と題する講演がありました。

9月には慶應に当番がまわってきて，第3回の研究会が開かれました。この時には，文部省情報・図書館課沙藤隆茂氏から“図書館の相互協力”についての話を伺いました。沙藤氏は最近刊行された「学術雑誌総合目録　自然科学欧文編」に文部省側から参加されていました。第4回は11月に東京女子医大で行なわれ，テーマは“資料のマイクロ化”という最近のトピックで，女子医大の職員が医学図書館を対象に配布したアンケートにもとづき発表をしました。同時にマイクロ化の経験を持つ人達をアドバイザーに招いて意見の交換をしました。このように回を重ねてきて，徐々に講演会形式から研究発表という館員主導型の会合に変ってきていることは大きな進歩で，今後ともこの方向を維持したいものです。

去る5月，慈恵医大で行なわれた研究会は“メドラース”をスライドによって解説するという試みでした。アメリカ国立医学図書館で作成されたスライドとカセット・テープの視聴覚パッケージを慈恵医大が入手し，そのテープの内容を職員が分担して翻訳，スライドに合わせて解説するというすばらしい発表でした。医学会に使われる会場を使っての研究会なので設備も行き届いておりました。

合同研究会も1年を経過したので，この機会により多くの医学図書館員にも参加を呼びかけることになりました。また，独協医大など他大学からの参加希望も寄せられています。輪読会や合同研究会を通じて，より良いサービスを提供できるように知識を身につけていきたいと願っています。　（医学情報センター）

図書館・情報学科に博士課程開設

文学部図書館・情報学科に昭和50年4月1日から博士課程が開設された。この開設によって，同学科は高等教育機関としての外形をすべて整えたことになる。昭和26年，アメリカ政府の資金援助を受けて本塾大学に図書館学科（現学科の前身）が開設されてからちょうど24年目にあたる。この歳月は，アメリカから移植した図書館学という苗がわが国の土壌に定着するまでに要した期間といえる。定着期間としての24年が長いのか短いのか，これは人によって意見が分かれようが，この間1,000人を越える卒業生が同学科から世に送り出されている。最近，各地で図書館の近代化が進められているが，その担い手として活躍している図書館学科の卒業生の数は少くない。

学科開設16年後の昭和42年には修士課程が，そしていま博士課程が開設されたことは，より高度の知識と技術とを身につけた職能人を求める関係分野の要請と決して無縁でなはい。

博士課程の図書館，情報学専攻は，「修士課程を基盤とし，独創的研究によって学問的水準を高め，研究を指導する能力を養成する」ことを目的としている。わが国の現状をみると，全国で6,000人余の学生が100以上の大学で，図書館・情報学関係科目を受講している。この現勢は，将来拡大する方向にある。したがって，博士課程の開設は，将来予想される研究者及び教員の必要性を確実に見通した企画でもある。

アメリカでは，20以上の大学に図書館・情報学の博士課程が開設されている。そのため，これを基盤とする研究活動が活発に行われ，学問としての体系の確立に着実な歩みを見せている。もともと実務的な性格の強い図書館・情報学は，わが国ではややもするとその学問的側面を見失いがちであった。本塾に博士課程が誕生したことは，そのための理論研究の場が確立されたことを意味する。

カリキュラムの内容は，1）情報メディアに関する研究，2）情報処理に関する研究，3）情報システムに関する研究，の3本立てトロイカ方式となっていて，半実験的色彩を色濃打出している。1）の情報メディアでは，マルチメディア，出版物の形態をとる情報メディア，情報伝達プロセスにおける数値データ等についての特性の研究に焦点があてられている。2）の情報処理では，情報の蓄積・検索の技術の比較研究，その事例研究，機械化の実験的研究などが考えられており，3）の情報システムは，システムの分析・設計，国際的な情報システムやネットワークの分析・評価，分析・設計に有力な手法とされる定量的処理方法の研究，などを取扱うことになっている。学生は，3つのうちのいずれかひとつを専門的に研究し，原則として3年間のうちに講義・演習合わせて20単位を取得し，その後学位論文を提出することになる。講義を担当する教授陣のリストには，本塾内外の一流の学者が顔をそろえている。

博士課程とは，本来講義を主体とする教育の場ではない。したがって，カリキュラムに組み込まれた内容は，課程の方向ずけに対する一応の目安にすぎないものであって，これが最終的なものでないことは明らかである。また，このカリキュラムに組まれていないテーマ（例えば図書館の歴史）を研究したい場合は，3本のワクにとらわれずに適宜，処置されることになる。

このたびの博士課程の開設とは，要するに図書館・情報学に関する高度の研究を行おうとする者に対して，慶應義塾の人的・物的資源を具備した自学・自習の場が提供されたことに他ならないのである。

学部課程，大学院課程と整備されたわが国の図書館・情報学は，真の意味での一人歩きがこれから始まるのだといってよい。

（中島紘一記）

＜スタッフルーム＞

雑誌業務を担当して

井　上　加代子

理工学情報センターは発足後4年目を迎えたところです。過去3年間における業務の重点目標は蔵書資料の整備充実といういわば図書館活動の基礎作りの期間であったと考えられます。現在の蔵書数は82,000冊を超えたところです。内訳は製本雑誌52,000冊，単行書30,000冊であり，このことは理工学の専門図書館として，雑誌資料の収集に特に重点が置かれていることを示しています。

また，研究活動にとって最も重要な，カレント・ジャーナルの収集は現在1,900種類に達しますが，この内訳は購入によるものと，交換や寄贈によるものとに大別されます：①購入雑誌は882種類で，工学部の研究活動に不可欠の雑誌です。このため本年度は，1,780万円に及ぶ購入費が見込まれています。②交換による雑誌は480種類。国内・外の大学・研究所の発行する学術雑誌で，主に，*Keio Engineering Reports* との交換によるものです。③寄贈される雑誌は540種類。政府公共機関，企業体等の刊行物ですが，単なる広報誌は含まれていません。

特に上記の交換による収集雑誌には120種類のソビエト圏の重要な雑誌が含まれています。これらの雑誌はラトビア科学図書館とレーニン国立図書館より迅速かつ正確に送られてきます。こうした収集雑誌に欠号が生じた場合には，取扱書店や発行機関への補充要請を行なうばかりでなく，"U. S. Book Exchange" その他の国際的な交換機関を通じて積極的に欠号補充を行なっています。いずれにしろ，1,900種類のカレント・ジャーナルの受入れは，月平均で1,600冊，毎日約70冊近くの新着号を受入れ処理しなければなりません。また単に量的な問題ばかりでなく，上述したように，交換や寄贈による収集が，全体の半数以上に及んでいるために複雑な事務処理や特別な配慮が要求されています。

バックナンバーの整備状況は，製本雑誌の受入れ統計が示す通り，過去3年間で統計19,730冊に達しています。（昭和47年 5,482冊，48年 6,644冊，49年 7,584冊）この様な急速な拡充を果し得た成因は，従来から継続している雑誌の整備の他に，毎年，6年遅れで日本科学技術情報センターより約2,500種類，4,500冊以上の製本雑誌の寄贈を受け入れていることに因ります。こうした大量の寄贈雑誌の整理作業は年間を通じて，雑誌係ばかりでなく理工学情報センター全体の大きな仕事の一つとなっています。

このような状況の中で，雑誌業務を担当して2年間，非常な喜びと感じられたことは，数理工学科の増設に伴って，100種類に近い数学関係の基本的な雑誌が，そのバック・ナンバーと共に，一挙に増設整備されたことです。また，現在，最も心を痛めている問題は，熱心な研究者より，新規の雑誌購入を要請されることです。最近1年間に，強く購入を求められている雑誌が，16種類あります。これらの雑誌はいずれも1965年以降新たに発行された，それぞれ新しい分野の重要雑誌であり，その必要性を聞けば聞くほど，最近の異常な出版物の値上りに呆然としている状態です。

（理工学情報センター）

資料 I

「三田学会雑誌」の刊行状況調査

安　西　郁　夫

創立50年を迎えた頃の慶應義塾では，理財，法律，政治，文学の各学会は機関誌を持たず，義塾の公報である「慶應義塾学報」や学生自治制委員会の機関誌「三田評論」の誌面を借りて研究論文を発表していた。その三田評論は明治41年11月に廃刊となり，発行者である三田評論社は組織を改めて三田学会となり，林毅陸の命名になる「三田学会雑誌」を明治42年２月に創刊した。同誌は総合誌としてスタートを切ったが，各学会がやがて各自の機関誌を持つにつれて経済学専門誌としての性格を定着させ，大正３年７月からは理財学会によって発行されるようになった。昭和19年に発行機関は経済学部研究室となったが，昭和21年７月の復刊以後は今日に至るまで経済学会によって発行されている。戦時中の昭和19年と，用紙事情の悪化した昭和24年から25年にかけて，同誌は休刊を余儀なくされたが，これらの時期を除けば比較的順調に刊行を続けている。昭和49年末までに67巻705冊（日吉特別号２冊を除く）が発行されており，その本文は総計89,309ページに及んでいる。

66年という長い刊行の歴史を持つだけに，その完全なセットは恐らく慶應義塾図書館以外には所蔵されていないと思われる。そのセットも近年の補充によってようやく完全となったもので，他大学の図書館や研究機関の便宜を考え，先般同誌の第１巻から第61巻までが日本マイクロ写真の手によってマイクロ化された。それに先立って筆者は同誌の刊行状況を調査し，詳細なチェック・リストを作成した。昭和32年刊の「三田学会雑誌総目録」によれば，第42巻は第６号までしか発行されていないことになっているが，実際には７―８合併号まで発行されていたり，逆に発行されていない号が欠号として雑誌目録類に記載されていることが調査の結果判明した。他館の所蔵調査を容易にするため，チェック・リストを簡略化し，表の形で本誌に掲載することにした。お役に立てば幸いである。

（三田情セ　P.S.部長）

＜「三田学会雑誌」発行一覧＞

巻次	冊数	号次	発行年月	備考
1	5	1 ～ 5	明 42. 02 ～ 42. 06	
2	5	1 ～ 5	明 42. 07 ～ 42. 12	
3	6	1 ～ 6	明 43. 01 ～ 43. 06	
4	6	1 ～ 6	明 43. 07 ～ 43. 12	
5	4	1 ～ 4	明 44. 01 ～ 44. 10	

巻次	冊数	号次	発行年月	備考
6	4	1 ～ 4	明 45. 01 ～ 大1. 10	
7	4	1 ～ 4	大 2. 01 ～ 2. 10	
8	10	1 ～ 10	大 3. 01 ～ 3. 12	
9	12	1 ～ 12	大 4. 01 ～ 4. 12	
10	12	1 ～ 12	大 5. 01 ～ 5. 12	
11	12	1 ～ 12	大 6. 01 ～ 6. 12	
12	12	1 ～ 12	大 7. 01 ～ 7. 12	
13	12	1 ～ 12	大 8. 01 ～ 8. 12	
14	12	1 ～ 12	大 9. 01 ～ 9. 12	
15	12	1 ～ 12	大 10. 01 ～ 10. 12	
16	12	1 ～ 12	大 11. 01 ～ 11. 12	
17	10	1 ～ 10	大 12. 01 ～ 12. 12	
18	12	1 ～ 12	大 13. 01 ～ 13. 12	
19	12	1 ～ 12	大 14. 01 ～ 14. 12	
20	12	1 ～ 12	大 15. 01 ～ 15. 12	
21	12	1 ～ 12	昭 2. 01 ～ 2. 12	
22	12	1 ～ 12	昭 3. 01 ～ 3. 12	
23	12	1 ～ 12	昭 4. 01 ～ 4. 12	
24	12	1 ～ 12	昭 5. 01 ～ 5. 12	
25	12	1 ～ 12	昭 6. 01 ～ 6. 12	
26	12	1 ～ 12	昭 7. 01 ～ 7. 12	
27	12	1 ～ 12	昭 8. 01 ～ 8. 12	
28	12	1 ～ 12	昭 9. 01 ～ 9. 12	
29	12	1 ～ 12	昭 10. 01 ～ 10. 12	
30	12	1 ～ 12	昭 11. 01 ～ 11. 12	
31	12	1 ～ 12	昭 12. 01 ～ 12. 12	
32	12	1 ～ 12	昭 13. 01 ～ 13. 12	
33	12	1 ～ 12	昭 14. 01 ～ 14. 12	
34	12	1 ～ 12	昭 15. 01 ～ 15. 12	
35	12	1 ～ 12	昭 16. 01 ～ 16. 12	
36	12	1 ～ 12	昭 17. 01 ～ 17. 12	
37	12	1 ～ 12	昭 18. 01 ～ 18. 12	
38	6	1 ～ 8	昭 19. 01 ～ 19. 08	3－4，5－6合併
39	6	1 ～ 6	昭 21. 07 ～ 21. 12	

巻次	冊数	号次	発行年月	備考
40	8	1 ～ 12	昭 22. 01 ～ 22. 12	7－9，10—12合併
41	10	1 ～ 12	昭 23. 02 ～ 23. 12	1－2，11—12合併
42	6	1 ～ 8	昭 24. 01 ～ 24. 08	5－6，7－8合併
43	6	1 ～ 6	昭 25. 07 ～ 25. 12	
44	10	1 ～ 12	昭 26. 01 ～ 26. 12	3－4，8－9合併
45	12	1 ～ 12	昭 27. 01 ～ 27. 12	
46	11	1 ～ 12	昭 28. 01 ～ 28. 12	8－9合併
47	11	1 ～ 12	昭 29. 01 ～ 29. 12	9—10合併
48	12	1 ～ 12	昭 30. 01 ～ 30. 12	
49	12	1 ～ 12	昭 31. 01 ～ 31. 12	
50	11	1 ～ 12	昭 32. 01 ～ 32. 12	10—11合併
51	12	1 ～ 12	昭 33. 01 ～ 33. 12	
52	12	1 ～ 12	昭 34. 01 ～ 34. 12	
53	11	1 ～ 12	昭 35. 01 ～ 35. 12	10—11合併
54	12	1 ～ 12	昭 36. 01 ～ 36. 12	
55	12	1 ～ 12	昭 37. 01 ～ 37. 12	
56	11	1 ～ 12	昭 38. 01 ～ 38. 12	6－7合併
57	11	1 ～ 12	昭 39. 01 ～ 39. 12	7－8合併
58	11	1 ～ 12	昭 40. 01 ～ 40. 12	11—12合併
59	12	1 ～ 12	昭 41. 01 ～ 41. 12	
60	12	1 ～ 12	昭 42. 01 ～ 42. 12	
61	12	1 ～ 12	昭 43. 01 ～ 43. 12	
62	11	1 ～ 12	昭 44. 01 ～ 44. 12	10—11合併
63	11	1 ～ 12	昭 45. 01 ～ 45. 12	8－9合併
64	11	1 ～ 12	昭 46. 01 ～ 46. 12	2－3合併
65	11	1 ～ 12	昭 47. 01 ～ 47. 12	2－3合併
66	11	1 ～ 12	昭 48. 01 ～ 48. 12	2－3合併
67	11	1 ～ 12	昭 49. 01 ～ 43. 12	2－3合併

資料 II

年次統計要覧 <昭和49年度>

慶應義塾大学研究・教育情報センター

I. 図書費 <49年度実績及び50年度予算>

支部センター＼年度	49年度実績 <単位：円>			50年度予算 <単位：千円>		
	図書支出	図書資料費	(計)	図書支出	図書資料費	(計)
三田情報センター	**54,105,760**	**60,820,654**	**114,926,414**	**68,534**	**74,203**	**142,737**
図書館	53,580,760	616,014	54,721,774	68,534	1,025	69,559
研究室*		60,204,640	60,204,640		73,178	73,178
久保田基金	525,000		525,000			
(私大研究設備)	(13,577,000)		* * *			
日吉情報センター	**6,727,000**	**16,743,000**	**23,470,000**	**9,871**	**20,754**	**30,625**
図書館	6,727,000**	722,000	7,449,000	9,871	974	10,845
研究室*		16,021,000	16,021,000		19,780	19,780
(私大研究設備)	(4,845,500)		* * *			
医学情報センター	**22,644,836**	**818,370**	**23,463,206**			
〃	20,944,836	818,370	21,763,206	**27,228**	**1,000**	**28,228**
指定寄付金	700,000		700,000			
福沢基金	1,000,000		1,000,000			
理工学情報センター	**30,469,268**	**527,285**	**30,996,553**			
〃	13,868,978	527,285	14,396,263	**19,595**	**590**	**20,185**
指定寄付金	276,290		276,290			
数理工学科新設	16,000,000		16,000,000			
福沢基金	324,000		324,000			
(管理工学科委託)		(499,458)	* * *			
(私大研究設備)	(1,000,000)		* * *			
合計	**113,946,864**	**78,909,309**	**192,856,173**	**125,228**	**96,547**	**221,775**

注) * 特別図書費は含まず
** 神奈川県助成金800,000円を含む
*** (　) 内は合計欄には加算せず

Ⅱ—1） 蔵 書 統 計 <年間受入及び所蔵（累計）>

冊数 / 支部センター	年間受入						所蔵（累計）						
	単行本			製本雑誌			単行本			製本雑誌			合計
	和	洋	（計）	和	洋	（計）	和	洋	（計）	和	洋	（計）	
三田情報セ	11,685	12,952	24,637	4,354	4,382	8,736	377,562	286,439	664,001	85,102	80,978	166,080	830,081
図書館	6,367	4,944	11,311	1,396	1,182	2,578	298,029	184,782	482,811	55,160	27,663	82,823	565,634
研究室	5,318	8,008	13,326	2,958	3,200	6,158	79,533	101,657	181,190	29,942	53,315	83,257	264,447
日吉情報セ	3,841	2,548	6,389	318	1,140	1,458	104,879	57,014	161,893	10,184	10,767	20,951	182,844
図書館	2,923	64	2,987	146	1	147	71,783	5,733	77,516	6,505	143	6,648	84,164
研究室	918	2,484	3,402	172	1,139	1,311	33,096	51,281	84,377	3,679	10,624	14,303	98,680
医学情報セ	235	159	394	750	2,038	2,788	14,660	17,874	32,534	—	—	83,845	116,379
理工学情報セ	320	568	888	2,007	5,577	7,584	19,161	10,781	29,942	13,873	38,454	52,327	82,269
合計	16,081	16,227	32,308	7,429	13,137	20,566	516,262	372,108	888,370	—	—	323,203	1,211,573

Ⅱ—2) 蔵 書 統 計 <逐次刊行物：カレントタイトル数>

	和 雑 誌	洋 雑 誌	(計)
三田情報センター	3,602	1,815	5,417
図 書 館	1,245	607	1,852
研 究 室	2,357	1,208	3,565
日吉情報センター	364	390	754
図 書 館	255	11	266
研 究 室	109	379	488
医学情報センター	908	1,016	1,924
理工学情報センター	908	997	1,905
(計)	5,782	4,218	10,000

Ⅱ—3) 蔵 書 統 計 <書庫のスペース>

冊	収蔵可能数	現所蔵数	スペース	余裕年数*
三田情報センター	969,175	857,425	111,750	3.34
図 書 館	600,375	592,618	7,757	0.55
研 究 室	366,100	264,807	101,293	5.19
日吉情報センター	177,025	182,844	—5,819	—0.74
図 書 館	98,500	84,164	14,336	4.57
研 究 室	**78,525	98,680	—20,155	—4.27
医学情報センター	118,093	116,379	1,714	0.53
理工学情報センター	124,600	82,269	42,331	4.99

注) *スペース冊数を年間増加冊数で除した数値
**共通書庫のみ

Ⅲ—1) 利 用 統 計 <貸出及び閲覧冊数>

冊数	館外貸出 教職員	館外貸出 学生	館外貸出 (計)*	館内閲覧	前年度比 *館外(計)
三田情報センター	11,139	55,908	67,047		1.07
図書館	6,781	52,815	59,596	60,310	1.08
研究室	4,358	3,093	7,451	開架	0.98
日吉情報センター	3,288	9,235	12,523		1.16
図書館	1,124	9,235	10,359	15,302	1.23
研究室	2,164	×	2,164	開架	0.92
医学情報センター	—	—	32,528	全開架	0.91
理工学情報センター	—	—	12,264	全開架	0.87

Ⅲ—2) 利 用 統 計 <相互貸借(複写依頼を含む)>

件数	依頼(借) 国内	依頼(借) 国外	被依頼(貸) 国内	被依頼(貸) 国外	計
三田情報センター	249	124	678	65	1,116
日吉情報センター	52	1	—	1	54
医学情報センター	1,757	103	11,210	45	13,115
理工学情報センター	757	68	17,436	—	18,261

Ⅲ—3) 利 用 統 計 <複写サービス>

	学内 (件)	学内 (枚)	学外 (件)	学外 (枚)	合計 (件)	合計 (枚)
三田情報センター	31,383	731,443	1,726	42,378	33,109	773,821
日吉情報センター		49,051	—	—		49,051
医学情報センター	49,825	417,696	18,474	119,444	68,299	537,140
理工学情報センター	29,121	386,516	17,436	153,959	46,557	540,475

＝編集後記＝

◇文化・教養と訳される culture の動詞形に「耕す」,「探求する」という意味の cultivate がある。「KULIC」は単に当センターのPR誌というイメージにとらわれることなく，当センターが持つ研究・教育活動的側面と大学事務サービス的側面との接点を常に cultivate したいと願っている。これは図書館が催す展覧会においても同様である。清水氏の「国宝“秋草文壺”の思い出」はそのような期待に応える一つの成果である。また山岸氏の「レオナルド・ダ・ヴィンチの地図」は偉大な教養人であったダ・ヴィンチの一側面を示してくれた。

◇「文献収集によせて」や「語り合う人々」は利用者の微妙な心理を余すところなく伝えている。このような感情を考慮しながら，多角的な情報の管理技術員である私たちは「合同研究会」で研鑽し，実務的な「雑誌業務（等）を担当」することによって効率よい図書館サービスを提供しなければならない。今回も「図書館サービスとシステム化」と題して３編を得た。

◇66年という長い刊行歴史を持つ「三田学会雑誌」がマイクロ化された。同時に安西氏の手で詳細な刊行状況リストが作成された。喜ばしいことである。

◇本塾文学部図書館・情報学科に博士課程が新設された。そこで生れる新理論を私たち実務家が現場で検証し，フィード・バックすることによって，この学問が増々進展することを望みたい。

（渡部記）

＝編集委員＝

本部事務室	渋川雅俊
三田情報センター	渡部満彦
日吉情報センター	加藤孝明
医学情報センター	佐藤和貴
理工学情報センター	森園　繁

＝〈日吉情報センター〉メモ＝

◇情報サービス・デスクの開設（49年９月）

研究室側にも教員対象の情報サービス係を置き，文献調査や他機関への文献複写依頼等のサービスを開始した。

◇研究室書庫利用時間の延長（49年11月）

かねてより懸案中であった研究室書庫の利用時間を午後６時30分まで延長し，教員利用の便宜を図った（従来は４時30分閉室）。

◇藤山記念図書館レファレンス・ルームの拡張工事（50年３月）

参考図書，逐次刊行物類の増加に伴い，一階レファレンス・ルームの狭隘を来たしていたが，隣室の所長室兼会議室の仕切り壁を撤去し，そこまでサービス・エリアを拡張した。